

## 4章 まとめ

家庭できちんと「しつけ」しましょう

発達段階に応じた指導を続けましょう

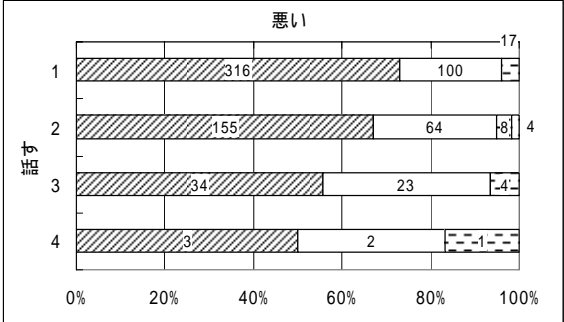
子どもたちに声をかけましょう

大人が「見本」を示しましょう



# 家庭できちんと「しつけ」しましょう

家庭でのしつけについて必要性や大切さを言って聞かせたり、子どもの好ましくない行動には注意をしたりする家庭、また、生活について注意や意見ををする際に子どもが納得できるように気を配っている家庭では、子どもにしつけが身に付いており、規範意識が高い傾向が見られました。

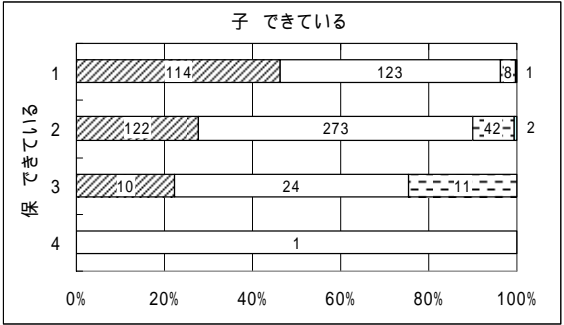


55 ページ参照

このような家庭では、保護者が子どもの健全な成長を願って、社会のルールやマナー、人に迷惑をかけることなどについても具体的なことを意図的に話して聞かせていることでしょう。そのことが、規範意識の高い子が育つことにつながるものと思われます。

一方で、児童生徒がしつけについて言われているという割合が、保護者がしつけについて話しているという割合より低いことから、大人が言葉をかけている割に子どもの意識には残っていないことも分かりました。大切なことを伝えたいがために子どもに話すのですから、もっと子どもたちの意識に残るような話し方を工夫するとよいでしょう。

また、家庭でのしつけに関することを、保護者ができていると回答しているグループの家庭では、児童生徒もできていると回答している傾向があり、保護者と児童生徒の意識には違いがないことも分かりました。保護者が子どもの行動を評価したときには、子ども自身も自分の行動について同じような評価をしていることが多いようです。「できていない」と評価したときには、自信をもって指導してよいのだらうと思われます。逆に、「できている」と評価したときには、「できて当たり前」ではなく「よくできたね」「ありがとう」などと声をかけるなどして褒めたり認めたりすることで、子どもたちの自己肯定感につながるのではないのでしょうか。



## 発達段階に応じた指導を続けましょう

「ルール」や「マナー」について質問したところ、多くの児童生徒が、善悪の判断では「悪い」、他人の行動には「いやな気がする」と回答しています。

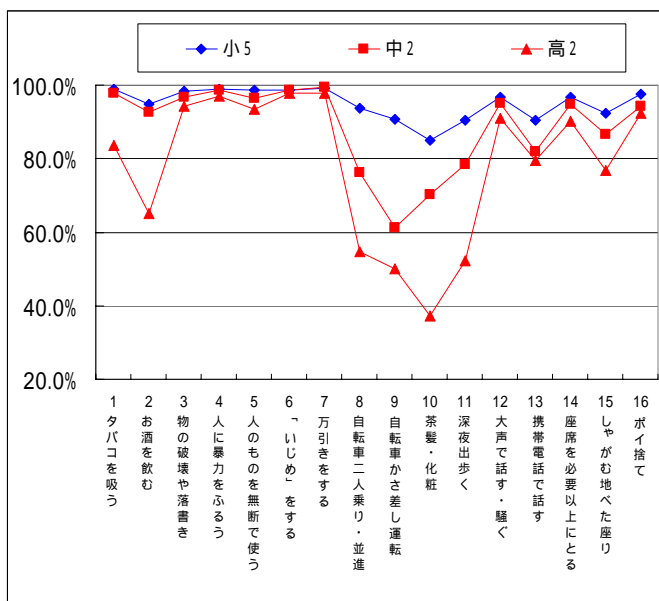
特に、暴力や「いじめ」などは、どの学年でも非常に多くの児童生徒が「悪い」「いやな」許せない行動と考えています。また、電車などの車内で携帯電話で話す・座席を必要以上にとる・通路などにしゃがみこむなどの「マナー」についても同様に考えています。

子どもたちの規範意識は、学年が上がるにしたがって低くなっています。子どもたちは、「ルール」や「マナー」についての善悪の判断基準を、物理的・肉体的・精神的な面での危害や被害が人に直接及ぶか否かというところに置いて

いるようです。しかし、「自分がよければかまわない」ということではなく、「人に迷惑をかけることは悪いこと、いけないことであり、児童生徒がそのような行動を慎むことができるように指導していくことが大切であると考えられます。また、他者に心理的な不快感を与えることも、それ自体迷惑なことであると認識させる必要もあるのではないかと思います。

子どもたちの望ましい規範意識をはぐくむには、幼少期からの家庭でのしつけが土台になります。しかし、子どもたちは、発達段階に応じて、行動も意識も家庭から範囲が広がっていきます。その中でかかわる多くの大人が、それぞれの立場でルールやマナーについて、指導し続けていくことも必要になります。また、人や立場が違って、多くの大人が、同じ基準で指導することが、子どもの規範意識を高めることになるのではないのでしょうか。

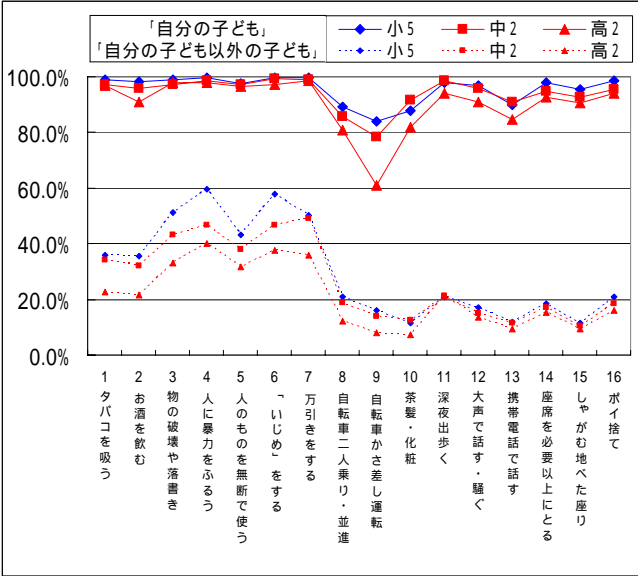
特に、子どもたちが集団生活を送る学校には、人とのかかわりの中で善悪の判断を身に付けていく多くの機会があります。学校が中心になりながら、地域や社会の協力を得て、成長過程にある子どもたちに、発達段階に応じた指導を続けていきましょう。



20 ページ参照

# 子どもたちに声をかけましょう

保護者は、自分の子にはしつけやものの善悪について、よく話をし、悪いことをすれば注意すると答えています。ところが、自分の子ども以外の子どもが悪いことをしていたら「注意するか」について質問したところ、右のグラフのように、他人の子どもだと注意しない傾向が顕著です。



32 ページ参照

記述による回答の中には、町で見かけた児童生徒の迷惑行為については、「注意するのが怖い」「注意すると何をされるかわからない」という意見がいくつか見られました。健全な社会をつかっていくためには、注意すべきときに大人として適切な注意をすることが大切であるとは分かっていますが、なかなか声をかけにくい状況もあるようです。

問題と思われる行動に出会って注意しようとするときに、「絶対に注意して改めさせよう」という気持ちが強すぎると高圧的な態度になってしまったり、怖いという気持ちが強いと妙に遠慮して注意が中途半端になってしまったりするかもしれません。また、緊張した気持ちが相手に伝わるため、相手も身構えてしまい、開き直ったり、反発してしまったりすることが予想されます。

特別に「注意をする」と身構えてしまうと難しいので、「どうしたの?」「ちょっとごめんね、さっきから見てたんだけど気になってね・・・」「何かあったの?」など、何気ない声かけができないものではないでしょうか。すぐに行動を止められないとしても、「まわりは見ているよ」「無視できないでいるよ」というメッセージとして子どもたちに伝えることになり、次の機会の抑止力となることもあると考えられます。

また、地域社会にあっては、普段からあいさつなどの声をかけたりすることで、いつも大人が子どもたちのことを見ていることを、子どもに伝えたり示したりしていきたいものです。自然に声をかけることができる大人の力が、子どもたちの意識の高まりにつながっていくでしょう。

# 大人が「見本」を示しましょう

子どものルールやマナーを守ろうとする意識を高めるためにどうしたらよいと思うかを、児童生徒と保護者に質問しました。

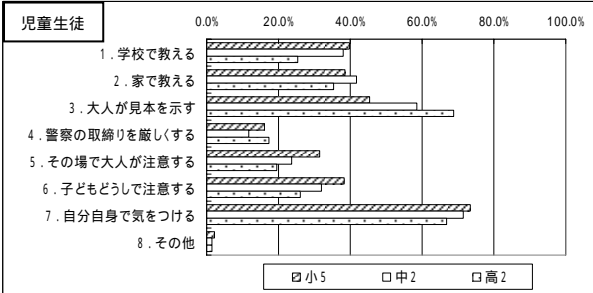
保護者の回答で最も多かったものは、「大人が見本を示す」という内容でした。これは、児童生徒でも、「自分自身で気をつける」に次いで多く回答されたものであり、保護者も児童生徒も、大人が社会のルールやマナーを守る見本となっていないと感じていることが分かりました。

また、規範意識に関する項目では、児童生徒の学年が上がるにしたがって、飲酒、喫煙、自転車の二人乗り・並進、自転車の傘差し運転などを容認する傾向が見られました。この項目については、保護者にも似たような傾向が見られました。

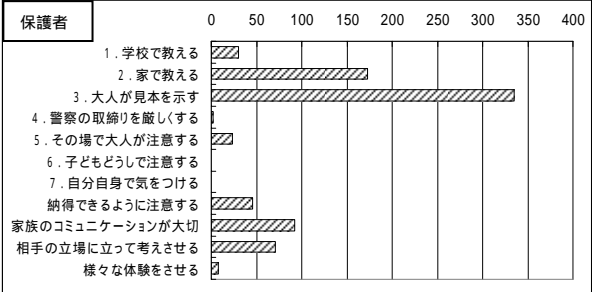
特に、自転車の乗り方についての意識が非常に低いことは、本県の交通事故による死亡者発生割合が全国ワースト1であることと無関係ではないかもしれません。「これくらいはいいだろう」「みんなやってるから」といった考えではなく、法律で定められていることの理解を促すことが必要です。また、社会および学校においてルールとして定められているものについても、「守ろう」という意識を大人も子どもも高めていくべきでしょう。

見本を示すこととは、取り立てて何か特別なことすることではありません。例えば、日常の様々な場面や、ルールやマナーを逸脱した事件の報道などの機会をとらえて、それが「悪い」ことであることを意図的に話題にしたり、どう行動すべきかについて話し合ったりすることが大切です。

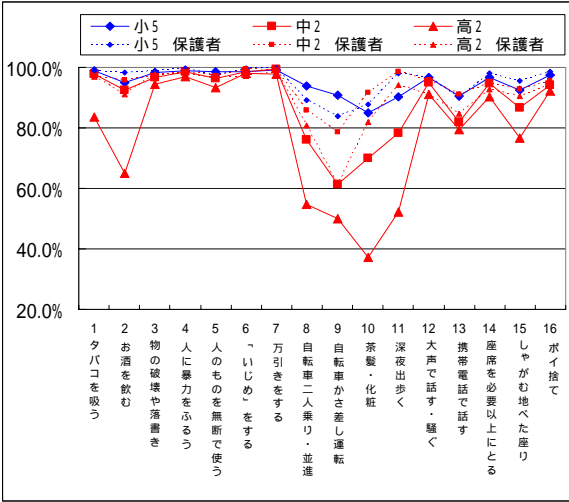
そのような毎日の小さな積み重ねが、子どもの心に浸透し、ゆるぎない規範意識を作り上げるための糧になるのではないのでしょうか。



45 ページ参照



48 ページ参照



33 ページ参照